

ポスター | リハビリテーション/体位保持/レクリエーション/コミュニケーション/その他

2025年11月28日(金) 13:00 ~ 14:00 会場 (シーモール 5F フリースペース)

[P-LGFEZ] リハビリテーション2/体位保持/レクリエーション/コミュニケーション/その他

座長：池上 美保代 (介護老人保健施設あいおい)

13:00 ~ 13:08

[28-P-LGFEZ-01]

介護老人保健施設における自費リハ利用者の傾向と目的
～導入から一年間の振り返り～

東京都 ○黒川 良輔, 井上 愛, 内海 千尋, 工藤 香澄, 田淵 かおる, 米本 紗喜 (医療法人社団 健育会 介護老人保健施設ライフサポートひなた)

13:08 ~ 13:16

[28-P-LGFEZ-02]

3Dプリンター導入～運用までの課題解決の取り組み

福岡県 ○高山 勇真 (介護老人保健施設あやめの里)

13:16 ~ 13:24

[28-P-LGFEZ-03]

面談により歌う喜びを取り戻したパーキンソン病の事例

山口県 ○岩崎 絵美, 井手 真奈未 (老人保健施設はくあい)

13:24 ~ 13:32

[28-P-LGFEZ-04]

不調の原因ってなんじゃろ

移乗の基本に戻ってみよう

岡山県 ○松本 真弓¹, 榊原 恵理子¹, 難波 淳子¹, 中野 美代子¹ (1.介護老人保健施設 倉敷あいあいえん, 2.介護老人保健施設 倉敷あいあいえん, 3.介護老人保健施設 倉敷あいあいえん)

13:32 ~ 13:40

[28-P-LGFEZ-05]

季節感を意識した昔ながらの行事

京都府 ○澤田 めぐみ, 藤川 未来, 藤本 拓実, 倉橋 岳志 (介護老人保健施設萌木の村)

13:40 ~ 13:48

[28-P-LGFEZ-06]

運動性失語症のある利用者の思いを引き出す支援

広島県 ○藤江 未幸, 北木 弥生, 佐伯 奏美 (介護老人保健施設はまな荘)

13:48 ~ 13:56

[28-P-LGFEZ-07]

老健における入院リスクを減らすための予備的研究

長野県 ○浦野 篤, 横沢 明美, 原 瑞恵 (介護老人保健施設ハーモニー)

ポスター | リハビリテーション/体位保持/レクリエーション/コミュニケーション/その他

2025年11月28日(金) 13:00 ~ 14:00 会場 (シーモール 5F フリースペース)

[P-LGFEZ] リハビリテーション2/体位保持/レクリエーション/コミュニケーション/その他

座長：池上 美保代 (介護老人保健施設あいおい)

13:00 ~ 13:08

**[28-P-LGFEZ-01] 介護老人保健施設における自費リハ利用者の傾向と目的
～導入から一年間の振り返り～**

東京都 ○黒川 良輔, 井上 愛, 内海 千尋, 工藤 香澄, 田淵 かおる, 米本 紗喜 (医療法人社団 健育会 介護老人保健施設ライフサポートひなた)

【目的】

介護老人保健施設 (以下老健) でのリハビリテーション介入時間は、入所日から三か月を経過すると短期集中及び認知症短期集中リハビリテーション実施加算が終了し、三分の一程度に減少する。当施設は超強化型老健を取得しており、入所者が重度化の傾向にあり、入所三か月以内で在宅復帰をすることが困難となる症例が増加しており、介入時間が減少しながらも在宅復帰率を高めることに難渋していた。

そこで当施設では入所後三か月を経過する入所者に対して、任意の自費リハビリテーション (以下自費リハ) を導入した。しかし老健入所者への自費リハに関する先行研究は少なく、当施設でも利用した症例についての傾向を把握できていなかった。

そのため老健における自費リハを利用した症例についての傾向と利用目的について調査をしたため報告する。

【方法】

対象はX年5月からX1年4月にA老健に入所した96名のうち、1回60分の自費リハを利用した後に退所した者とした。

方法1) 基本情報として、対象者の性別、年齢、介護度、主疾患、Barthel Index (以下BI)、自費リハの利用期間と述べ回数、退所先をカルテより後方視的に調査した。

方法2) 自費リハを担当した療法士に対してアンケートを行い、自費リハの目的について、自費リハの利用で増えた介入時間および利用者が得られた効果について5段階評価で調査をした。

集計したデータは匿名化し個人が特定できないように扱った。なお、発表にあたっては当施設倫理委員会の承認を得た。

【結果】**1) 基本情報**

対象者：12名 (男0名, 女12名) 年齢：82.8±7.2歳

介護度 (中央値) 3 (介護1=2、介護2=1、介護3=3、介護4=3、介護5=3)

主疾患：脳血管8、骨折3、筋骨格系1

BI：65.0±20.4点

自費リハ利用期間3.3±1.6ヵ月、延べ回数12.1±7.6回

退所先：在宅8、施設3、入院1

2) アンケート結果

目的：在宅復帰のための移動能力向上6、トイレ動作能力向上1、家屋環境の練習2

介護施設の方向で移動能力向上2、摂食嚥下機能の維持向上および家族指導1

効果：4.6±0.7 時間：4.5±0.5

【考察】

自費リハを利用した者は12名であり、これは入所者全体の12%であった。性別は全員が女性で

あったが、当施設では入所者の約80%が女性であることから、今後自費リハ利用に関して性差がみられるかについては、経過を追う必要があると考える。

平均年齢82歳、要介護3以上が75%、脳血管疾患が66%、BI65点（部分介助レベル）であることから、中重度の入所者に対して必要な訓練時間を上乘せするために自費リハを多く提供している傾向が示された。

アンケート結果から、自費リハの目的は5つに分けることができた。また、在宅復帰を目的とした9名は、1名の入院を除き全員が在宅復帰していた。

介護施設の方向で介入した3名は、退所先の施設でも安全に自立した移動ができることを目的とした症例に加え、退所先の施設でも家族が利用者に対して安全にお楽しみ食を摂取できるように関わることが自費リハで行われていた。担当療法士に調査した効果と時間については高い評価が得られた。通常の介入時間に上乘せして関わることが、目的を達成できることに繋がっているためと考える。

今後の展望としては、対象者を増やして統計学的に傾向をみていくこと、利用者及び家族に対して自費リハに関する満足度を調査したいと考える。

ポスター | リハビリテーション/体位保持/レクリエーション/コミュニケーション/その他

2025年11月28日(金) 13:00 ~ 14:00 会場 (シーモール 5F フリースペース)

[P-LGFEZ] リハビリテーション2/体位保持/レクリエーション/コミュニケーション/その他

座長：池上 美保代 (介護老人保健施設あいおい)

13:08 ~ 13:16

[28-P-LGFEZ-02] 3Dプリンター導入～運用までの課題解決の取り組み

福岡県 ○高山 勇真 (介護老人保健施設あやめの里)

【はじめに】

近年、3Dプリンターの活用が医療・介護現場において広がりを見せており、個別ニーズに応じた福祉用具の迅速な提供が可能となってきた。介護老人保健施設においても、既製品では対応が難しい事例に対し、施設内で創作・修正が可能な3Dプリンターは大きな可能性を持つ。本取り組みでは、3Dプリンター導入時の課題や、既存の福祉用具では対応が困難だった利用者への支援を行った経過、そして将来の展望について報告する。

【取り組み内容と経過】**1.導入検討～導入期**

導入前には「費用面」「耐久性」「故障時の対応」「保守点検方法」などへの不安から、導入までに時間を要した。研修会への参加を通じて、詳しい講師から助言を受けることで課題を整理し、対応策を得たことで購入に至った。

2.導入初期

導入後は、3Dプリンターの組み立てや操作に慣れるまで時間を要した。特に、印刷面の高さ調整やデータの変換方法の理解に時間がかかったが、研修会や動画サイトなどを活用しながら知識と技術の習得に努めた。3Dデータをインターネット上からダウンロードして利用できることを学び、ゼロから設計する必要がないことが分かり、運用へのハードルが下がった。

3.運用期

最初はダウンロードした3Dデータを使ってサンプル品を作成し、施設内で展示や紹介を行った。これをきっかけに、利用者やスタッフから「こういうものがほしい」といった相談が寄せられるようになった。実際の生活場面での困りごとをもとに、既存の3Dデータを加工したり、必要に応じて新しくデータを設計したりすることで、道具の作成と提供を行った。

【結果】

1年間で33種類・83個の道具を作成。そのうち24種類はダウンロードしたデータを利用し、9種類は新たに設計・作成したものであった。具体的な製作品を2例紹介する。

1例目：車椅子ブレーキ延長レバー

片麻痺のある利用者が使用する車椅子のブレーキは、左右同時に操作する特殊な構造であり、市販の延長レバーが適合しなかった。そのため、実物のサイズを測定し、参考データを基に円形タイプ・四角形タイプを作成。使用後に「角が当たって痛い」との意見があり、形状を丸く修正し再作成した。利用者の反応を元に改良を重ねることで、使いやすさを追求できた。最終的に自宅でも継続して使用する事が可能になり、「これがあると便利だね。手が届きやすい。」と利用者より言われる。

2例目：介護ベッド柵対応コップホルダー

「ベッドに座ってコップを置きたい」という相談を受け、L字型の介護用ベッド柵に取り付けられるホルダーを作成。市販品では対応できなかったため、柵のサイズを測定し、結束バンドで固定できる形状に設計。安全性のために角は紙やすりで削った。椅子に座って水分摂取できることを想定し、体幹や認知機能が安定している方を対象に説明した。使用者からは「自宅でも

使いたい」、スタッフからは「飲みやすくなって満足されている」との声が聞かれた。

【考察】

3Dプリンターの活用は、個別のニーズに応じた道具の作成を可能にし、利用者の生活の質（QOL）の向上に寄与した。導入初期には機器操作やデータ作成への不安もあったが、研修会や動画教材を通じて知識を得ることで、誰でも取り組みやすい環境が整った。特に、既に公開されている3Dデータを活用することで、ゼロから設計する負担を軽減でき、より短時間で作成に取りかかることができた。また、現場からの声を反映して改良を重ねるプロセスは、創造的な支援の実現に繋がった。

【今後の展望】

今後は、実際に使用した利用者へのアンケート調査を行い、QOLの変化や日常生活での効果を数値化して評価する仕組みを検討している。また、現場で困っていることや必要とされる道具のニーズを把握するために、簡単な質問紙を用いた情報収集も計画している。さらに、SNSなどを活用して実践例や設計方法の情報を発信し、他施設・病院からの相談にも応えられる体制を整えていきたいと考えている。

ポスター | リハビリテーション/体位保持/レクリエーション/コミュニケーション/その他

■ 2025年11月28日(金) 13:00 ~ 14:00 ■ ポスター会場 (シーモール 5F フリースペース)

[P-LGFEZ] リハビリテーション2/体位保持/レクリエーション/コミュニケーション/その他

座長：池上 美保代 (介護老人保健施設あいおい)

13:16 ~ 13:24

[28-P-LGFEZ-03] 面談により歌う喜びを取り戻したパーキンソン病の事例

山口県 ○岩崎 絵美, 井手 真奈未 (老人保健施設はくあい)

【はじめに】

防府市におけるC型とは、事業対象者と要支援者を対象に、疾病等で生活機能が低下した高齢者が、動機づけ面談でリハビリ職と利用者が毎週、日々を振り返り話し合う事で、利用者が自身の可能性に気づき、元の生活を取り戻すための暮らしを知り、意欲的に自分で自分を管理できることを支援するサービスである。1) 今回、歌うことに自信を無くした女性に面談を実施した。強い葛藤を抱えていた本人が、なぜ行動変容に至ったのか考察を交えて報告する。

【事例紹介】

70代女性。要支援2。障害高齢者の自立度はJ2、認知症高齢者の日常生活自立度は自立。17年前にPDと診断される。内服自己管理。ON・OFFがあり、OFF時の頻度が増えている。声量の低下により電話や会話場面で伝わりにくいことが増え、更に甲状腺腫手術の後遺症により高い声が出なくなった。家族でカラオケするほど歌が好きだったが、下手と言われ歌えなくなってしまった。現在は元夫と同居中。口喧嘩が多く、元夫の言葉にストレスを感じる事が多かった。

【方法】

12回の通所プログラム(週1回2時間程度)を行う。C型では対象者の意欲や能力を向上させ、セルフマネジメントを可能するために、セルフマネジメントシートを用いた動機づけ面談を中心にサービスを提供した。

【経過】

初回評価時の発話明瞭度は2.5。声質の異常(氣息性嘔声)、抑揚の単調さ、声量の低下がみられた。最長発声持続時間は15秒。元夫から言葉が聞こえないと言われることが増え、更に65歳で行った甲状腺腫手術の後遺症により声域が狭まり、好きだった歌を人前で歌えなくなった。しかしそれでも歌いたい、大きな声を出したいと希望もあり、発声練習、歌唱などの練習を提案した。1週間後振り返りを行うと「何を歌えばいいか考えるだけで終わった。歌から離れて考えないようにしたら楽になった。」と記載され、提案した課題は実施していなかった。介入～5週目まで「下手で夫に馬鹿にされる。歌はダメだ。」という記載や発言が多かった。歌が辛いなら1度歌から離れて、言葉をはっきり話す練習をしてみるのはいかがでしょうかと提案した。しかし6週目には再度歌はダメだと記入されており、本人にとって歌とは何かと質問した。「歌は楽しいもの。そういえば従妹がカラオケに誘ってくれた。下手でも皆楽しく歌うって。」と笑顔で話された。7週目から本人は初めて課題の発声練習を開始し、「近所のカラオケしている音に合わせて歌ってみた。」「電話で友人との会話もしやすくなった。」と前向きな発言もみられた。8週目には練習回数も増え「滑らかに声が出る」と記載され始め、最長発声持続時間は19秒、発話明瞭度1.5と改善がみられた。そこで歌に対する抵抗感が和らいだと判断し、C型参加者で3曲ほど歌わないかと誘うとすぐに了承し、童謡、歌謡曲を歌うことができた。その日の記載は「最後に歌で終わるのもいいね」であった。それからは「歌が楽しくなってきた。」「気が付いたら草抜きの途中で歌を口ずさんでいた」など前向きな記載が増えていった。終了間近に本人は「最初はどのようにでもなれと思っていた。私は考え方が変わった。こんなに話しを聞いてくれて私のために言ってくれている。夫に対しても私のために思ってくれていると思うように

なった。」と話そうになっていた。終了間際には元夫とは良好な関係になり、最近は歌う事に協力的な様子である。

【結果】

発話明瞭度は1.5、最長発声持続時間は20秒となり、環境音に影響されることもあるがほぼ聞き返しなく会話が可能となった。最終週のマネジメントシートには「友人と楽しく話した、タクシーの運転手と話が盛り上がった」と記載されていた。今後については歌が行えるサロンに意欲を示し、住民主体の通いの場にも参加予定である。元夫に対しては一緒に誕生日を祝うなど、共に過ごす時間に喜びを感じるようになった。

【考察】

1～5週目面談時、本人は歌おうと行動するも「夫から馬鹿にされる」などの発言が多く、「歌いたい、でも下手だから歌いたくない。」という葛藤を抱いていた。言語聴覚士の介入後、練習方法を提案するも必要な行動を選べない状況が続き、歌の事を考えなければ楽という状態に陥った。それでも「やらないと」と継続の意思があり、内的動機を引き出すために「(本人にとって)歌とは何か」と質問した。ここで「下手でも楽しく歌えればいい」と答えたことから、初めて変化への可能性に気付くための支援が行えたのではないかと推測する。この出来事が行動変容につながり、本人は7週目から発声練習を開始、練習量も増えていった。マネジメントシートには前向きな記載が増え、更に面談で振り返ることで、意欲の維持、強化に務めた。結果、発声機能、発話明瞭度も改善、集団での歌唱でも楽しく歌えたという成功体験を積み重ね、自己効力感を高めることができた。そして、歌については家事をしながら歌うといった気分転換になり、更に上手くなるため練習を続けると意欲的であった。また本人の行動変容は、夫と誕生日を一緒に祝うといった家庭内の役割、友人との交流という参加にもつながった。行動変容に至るまで6週という時間を要したが、「歌いたいけど下手だから歌いたくない」という葛藤に苦しんだ本人にとって、必要な事は改善への情報提供のみではなかった。日々を振り返り、話し合うことで変わりたいという思いを自ら引き出す事であったと考察する。

《引用文献》

1) 辻哲夫・飯島勝矢・服部真治．地域で取り組む高齢者のフレイル予防,中央法規出版株式会社,2021,p.74.

ポスター | リハビリテーション/体位保持/レクリエーション/コミュニケーション/その他

2025年11月28日(金) 13:00 ~ 14:00 会場 (シーモール 5F フリースペース)

[P-LGFEZ] リハビリテーション2/体位保持/レクリエーション/コミュニケーション/その他

座長：池上 美保代 (介護老人保健施設あいおい)

13:24 ~ 13:32

[28-P-LGFEZ-04] 不調の原因ってなんじゃろ

移乗の基本に戻ってみよう

岡山県 ○松本 真弓¹, 榊原 恵理子¹, 難波 淳子¹, 中野 美代子¹ (1.介護老人保健施設 倉敷あいあいえん, 2.介護老人保健施設 倉敷あいあいえん, 3.介護老人保健施設 倉敷あいあいえん)

不調の原因ってなんじゃろ
～移乗の基本に戻ってみよう～

【はじめに】

私達が働いている療養棟では要介護2～5までの入所者様が日々生活している。職員が行う介護としては移乗介助が最も多く、職員の平均年齢も年々高くなり身体的不調を訴える者も増えてきた。それが職員のモチベーションの低下を招き、入所者様への介助の質にまで影響を及ぼしているのでは無いか？という声も聞こえるようになった。

まず始めに職員に対しアンケート調査を実施。その後身体的不調の痛みを軽減する為に当施設で行った取り組みを報告する。

【取り組み内容】

現在当施設職員は看護師11名、介護士26名、計37名の職員である。うち8名が20代(ベトナム技能実習生5名を含む)残りは30代～70代(ベトナム技能実習生1名を含む)で特に50代の職員が多い。

アンケート内容は痛みの有無や痛みを感じる部位、どのような場面で痛みを感じるのか、介護に対する疑問や意見がないか調査を行った。

【アンケート結果、問題点】

アンケート集計の結果

- 1) 痛みを感じると答えた職員は8割程度いた。
- 2) 痛みの部位は肩や腰と答えた職員は7割程度いた。
- 3) どのような場面では、移乗介助時や入浴介助という回答が多数あった。
- 4) 介護に対する疑問や意見については

- ・移乗動作に不安がある。
- ・移乗介助などに使用する補助具を増やして欲しい。
- ・20代、30代の若い職員及びベトナム技能実習生もコルセットやサポーターを使用して業務に当たっている。

移乗介助時の動作に不安があると回答を受け、入所者様側から介助を受ける際に感じる職員に対しての思いを聞き取り調査した結果

- ・怖い
- ・落ちそうな

との回答があったので、アンケート内容の全てを理学療法士に報告した。

今回車椅子に乗車している入所者様の移乗介助に絞り相談を行った。

まず理学療法士からはボディーメカニクスを取り入れた動画を勧めてもらった。職員全員に視聴してもらい意識付けをして業務に当たった上で、身体の状態の変化や気づきがあるか再度アンケート調査を行った。

回答には

(1) 移乗介助時に力任せになり無理な体勢で行っていたが、ボディーメカニクスを学んだことによりきちんとした移乗介助が出来るようになった。基本に戻ることで痛みの軽減に繋がった。

(2) ベトナム技能実習生や介護経験が浅い職員には、理学療法士から基本を学んでもらう為に直接指導して頂き、ためになった。楽になったと回答があった。

(3) 動画の内容をすでに実践出来ている人もいて、職員間のスキルの差を改めて実感することとなった。

(4) 学んだ事を実践しようとしても下肢に力が入らない方、拘縮が強い方、指示が入りにくい方には介助が難しかった。

回答を受け理学療法士に報告し相談をした。

(4) については、動画を撮影しながら理学療法士にレクチャーを受けた。

職員全員に再び視聴してもらい周知することができた。

ポイントを掴めば、介助が難しいと感じていた方も無理なく移乗介助が出来るようになった。

職員間でのスキルの差も少しずつだが埋まってきた。

【考察まとめ】

身体的不調の原因としてわかった事は

〈1〉正しく移乗介助を行っていたつもりでいたが忙しさや慣れ、介助量の多さなどの勝手な理由で無意識に基本から外れた介助を行っていた事に気づいた。その状態が定着してしまった事で身体に負担を掛け、痛みを引き起こす原因になってしまった。

〈2〉声掛けが不十分だった為に入所者様への不快な思いや怪我のリスクになってしまった。コミュニケーションが足りておらず声掛けの大切さを痛感した。

〈3〉本来移乗介助時に身体を近づけ適切な距離で介助していたが、ここ数年の感染症の増加により距離を取る介助になっていたことに気付かされた。

〈4〉ベトナム技能実習生には、これまで自分達のしやすい移乗方法を教えた事で痛みの原因を作ってしまったのではないかと反省させられた。

今回理学療法士からの指導により、介助者の身体的疲労の軽減に繋がる重心の置き方や効果的に使うべき筋肉の部位など新たな視点も得られた。

ベトナム技能実習生の不調部位が改善されることも期待したい。

この度の取り組みにより改めて何事も基本が重要であることを全員で意識周知することができた。

職員の身体的負担を最小限に抑えられただけでなく、お互いにとって優しい介助を行えるように変わったと実感している。

今後も継続的な取り組みを通じて基本に戻り、身体的不調の緩和と入所者様への安心安全な介護提供を第一に目指し、介助の質の向上に努めていきたいと思う。

ポスター | リハビリテーション/体位保持/レクリエーション/コミュニケーション/その他

■ 2025年11月28日(金) 13:00 ~ 14:00 ■ ポスター会場 (シーモール 5F フリースペース)

[P-LGFEZ] リハビリテーション2/体位保持/レクリエーション/コミュニケーション/その他

座長：池上 美保代 (介護老人保健施設あいおい)

13:32 ~ 13:40

[28-P-LGFEZ-05] 季節感を意識した昔ながらの行事

京都府 ○澤田 めぐみ, 藤川 未来, 藤本 拓実, 倉橋 岳志 (介護老人保健施設萌木の村)

施設入所生活は、単調になりやすく外出の機会も限られているので生活において刺激が少なく、時間や季節感覚が薄れやすくなる。当施設では日々のレクリエーションに加えて、多職種から選出された職員が行事委員会を運営し月ごとに行事を開催してきた。時にはご利用者家族も参加する大規模な行事も開催してきたが、新型コロナ感染症蔓延を機に、その活動は縮小せざるを得なかった。現在、世間的に感染症対策は緩和されているが介護施設では一定水準の感染症対策を継続しなければならない。そのため、大規模なイベントを開催する事は難しく、行事委員会では企画の提案に行き詰っていた。そこで、盛大なイベントを開催する事に囚われず、行事委員会として基本に立ち返り『行事』のあり方を見直した。

『行事』とは恒例として日を定め取り行う催しの事である。また、人々の生活リズムとなっている『年中行事』は、季節や特定の時期に行われる催しの事である。古来より伝わる伝統的な行事や地域性のある行事、個人的な恒例行事もある。四季の変化に富む日本では、正月・花見・七夕・季節や地域の祭りなどの様々な行事があり、その時々家族や友人、地域との繋がりや季節を感じて来た。それらを改めて意識する事で、ご利用者が過ごしてきた生活において「馴染みのある・季節を感じる昔ながらの行事」をテーマとした年間行事を企画する事となった。

2024年 年間行事 1月：獅子舞 2月：節分会 3月：ひな祭り会 4月：お花見 5月：菖蒲湯 6月：お茶の日会 7月：七夕 8月：運動会 9月：秋祭り 10月：花火大会 11月：紅葉狩り 12月：餅つき・ゆず湯

1年の始まりは、厄払いや無病息災を祈願して日本各地で見られる伝統芸能の獅子舞とした。職員が段ボールで作成された獅子頭を持ち唐草模様のマントを身に纏いフロアを練り歩いた。ご利用者が笑顔で獅子頭に頭を噛まれる姿や「私も噛んで欲しい」との声が多く聞かれた。2月と3月は伝統の年中行事である節分と雛祭りをテーマに開催した。節分会では鬼に扮した職員へ豆の代わりにお手玉を投げ、普段は控え目なご利用者も白熱する姿が見られた。また、恵方巻の由来と具材について熱心に耳を傾けておられた。ひな祭り会では、その起源を説明して、ひな壇の配置を当てるゲームを行った。ご利用者が自宅で飾っていたひな人形について思い返し話される姿もあった。4月と5月は季節に沿った花をテーマに開催した。毎年恒例行事のお花見では、ご利用者の希望に沿って、施設車両でのお花見ドライブと敷地内のしだれ桜鑑賞に分けて楽しんで頂いた。過去にお花見をされた場所の話で盛り上がる中、「なかなか出歩けないので、お花見が出来て嬉しい」等の感謝の言葉をたくさん頂いた。菖蒲湯では、鑑賞する花菖蒲と湯に入れる葉菖蒲を組み合わせた。花菖蒲を飾り、湯船に葉菖蒲を浮かべ、浴室から上がる時の掛け湯は菖蒲の入浴剤を使用した。花菖蒲が開花していく様子や湯船の葉菖蒲に触れて、五感を使った内容となりたいへん喜ばれた。6月は当施設が京都府南部に位置しお茶の産地である事から、新茶を使用したお茶会を開催した。茶道経験のある職員が抹茶をたてて振る舞い、新茶を飲みながら茶摘みの経験を思い起こし話されるご利用者もおられた。7月の七夕はご利用者やご家族が願いを込めた短冊を笹に飾り、職員有志で結成したコーラス隊が初夏にちなんだ歌を披露した。サクスが得意な職員も参加し生演奏に聞き入る姿がみられた。8月と9月は幼少期や家族との思い出がたくさんあると思われる運動会と秋祭りを開催した。運動会では馴染みのある玉入れや綱引き等を

行い、職員も共に参加して楽しんだ。9月は施設全体の恒例行事である秋祭りを開催した。デイルームの1区画とリハビリ室等を利用して、ボランティアによる昭和歌謡ショーと職員が設営したお化け屋敷を実施した。各フロアが交差しない動線を確認しながら、ボランティアの協力を得て昔ながらの祭りの雰囲気を楽しまれた。また、お化け屋敷ではマルチシートを張り合わせて暗幕を作り手作りのお化けや衣装で演出した。恐怖より昔のお化けや面白みや懐かしさを重視し、「子供の時以来のお化け屋敷だった」「作りがすごいな」と喜びと驚きの声を数多く頂いた。10月は施設敷地内で花火大会を開催した。入所ご利用者限定の行事ではあったが、夕方から夕食までの短時間でスケジュールを組み2日間に分けて開催した。吹き上げ花火では歓声が上がり、手持ち花火では色の変化を楽しまれた。夕日が沈む中、煙の香りに懐かしさを感じながら子供と花火をした記憶を思い起され、「この歳になって花火が出来るなんて思いもしなかった」と感激される姿が印象的であった。11月の紅葉狩りでは春のお花見と同様のグループ分けを行い開催した。ドライブでは地域で馴染みのある神社を通り季節の移り変わりを感じて頂いた。12月は冬至で恒例のゆず湯と一年の締めくくりとして餅つきを開催した。ゆず湯では湯船につかりながらゆずを揉んで香りを楽しみながら身体を温めて、ゆず湯を自宅ですべていた事を懐かしんでおられた。餅つきは年末に鏡餅作りとして開催した。職員が手を添えながらたくさんのご利用に餅をついて頂く中、威勢よく餅をつく男性のご利用者もおられ大きな歓声が上がった。昔は自宅で餅つきをする家庭が多かったため、餅の水分量や硬さ等を細かく指導して下さる姿もあった。出来上がった鏡餅は各フロアに飾り、年始には手を合わせのご利用者もおられた。このように1年を通して季節や文化、生活に関連する行事を開催する事で、閉鎖的になりがちな施設生活に変化や彩りを添えられていると実感している。今後もご利用者の生活に寄り添った馴染みのある季節感を意識した行事を開催し、ご利用者と思い出を分かち合う機会を作っていきたい。

ポスター | リハビリテーション/体位保持/レクリエーション/コミュニケーション/その他

■ 2025年11月28日(金) 13:00 ~ 14:00 ■ ポスター会場 (シーモール 5F フリースペース)

[P-LGFEZ] リハビリテーション2/体位保持/レクリエーション/コミュニケーション/その他

座長：池上 美保代 (介護老人保健施設あいおい)

13:40 ~ 13:48

[28-P-LGFEZ-06] 運動性失語症のある利用者の思いを引き出す支援

広島県 ○藤江 未幸, 北木 弥生, 佐伯 奏美 (介護老人保健施設はまな荘)

【はじめに】

介護老人保健施設は、「利用者の尊厳を守り、安全に配慮しながら、生活機能の維持・向上をめざす」ことを理念とし、個々の生活を支える支援が行われている。利用者の状態や背景は多様であり、それぞれに応じた関わりや支援が求められる。中でも、言語機能を伴う利用者への支援は、意思疎通の難しさから日常生活の中でも特に配慮が必要である。運動性失語症は、理解力が保たれていても言葉がうまく出せず、思いや意思を伝えることが困難である。そのため、利用者ももどかしさや孤独感を抱きやすく、支援する職員側にも葛藤が生じやすい。

本報告では、脳梗塞の後遺症により運動性失語症のある利用者に対し、思いの表出を支えるために工夫したコミュニケーション支援の実践を紹介する。

【事例紹介】

A氏は、70歳代の女性。2年前に左脳梗塞を発症し、後遺症として右片麻痺および運動性失語症がみられ、1年前から当施設を繰り返し利用している。理解力は保たれていたが、自発的な発語は「これ」「あれ」などの指示語や、「うん」などの短い単語に限られていた。質問には頷きや首振りなどで答え、言葉での表出が難しく、意思伝達が十分にできず悲しさが表情に現れる場面もあった。

A氏は、元々社交的な性格で、人との関わりを好んでいた。しかし、日常のコミュニケーションでは、伝えようとする意欲があるものの、職員側が意図を汲み取れず、A氏が首を横に振って諦める様子が見られた。職員間では、A氏の思いを汲み取れずもどかしさを感じる声があった。また、A氏はベッド上で過ごす時間が長く、他者との交流もほとんどなかった。家族も、言葉の出にくさは理解しつつ、本人の思いが十分に伝わらないことを心配していた。

こうした状況をふまえ、A氏の思いを少しでも引き出せるような方法を見直し、コミュニケーション支援に取り組むこととした。

【実施・結果】

まず、A氏とのコミュニケーション方法について多職種で検討を行った。クローズドクエスションの活用やジェスチャーの導入を試みた。しかし、クローズドクエスションは職員側の問いかけに偏りやすく、A氏が自分の思いを語る機会が限られるという課題があった。そのため、発語そのものを促す支援の必要性があがった。

そこで、A氏に発語練習を提案したところ同意が得られ、職員と1対1で安心できる環境を調整し練習を開始した。練習には、日常生活でよく使う言葉を選び、イラストカードにした。イラストカードは、「お茶」「お風呂」「カーテン」などの9語を使用した。初期は言葉がでにくかったが、毎日繰り返すことで徐々に発語が明瞭になった。

この関わりを通して、A氏が職員や他利用者に話かける場面が増えた。レクリエーションでは歌を口ずさみ、ベッドで過ごす時間が減少するなど、交流の広がりや行動や表情の変化がみられた。また、「装具を見られるのが恥ずかしい」「こんな体になって情けない」など、本音を伝える場面もあった。伝わらないことがあっても、諦めずに伝えようとする姿勢が見られた。A氏は、「みんなと話ができてうれしい」と笑顔で語った。家族とも情報共有を行い、自宅でもイ

ラストカードを使った練習が継続された。娘からは、「母のためにここまでしてくれて本当に嬉しい」と感謝の言葉が聞かれた。

【考察】

本事例を通して、運動性失語症のある利用者に対しては、安心できる環境の中で繰り返し発語練習を行うことが、自己表現の意欲向上につながる可能性があることがわかった。最初はなかなか言葉にならず、伝えたい思いがうまく表現できない様子に戸惑いやもどかしさを感じたが、日々根気強く関わることで、少しずつ表情や発語に変化が見られるようになった。特に、本人の生活に関わる言葉を用いたことで、日常場面での発語につながり、周囲との交流も増えていった。うまく伝わらない場面があっても、職員が粘り強く耳を傾げることで、本人も諦めずに伝えようとする気持ちを持ち続けてくれたように感じる。職員側の関わり方が変わることで、利用者の意欲や行動に変化が見られることを実感した。また、家族との情報共有を通じて、施設と自宅の両面から継続的な支援を行うことが、本人の安心感や自信の回復につながったと考える。

「自分のために時間を取ってくれている」と本人が感じられるような関わりが、意欲の向上につながったと感じている。

さらに、言葉による表現だけでなく表情や仕草など、言葉にならない思いを読み取る力も重要である。職員一人ひとりが丁寧に対応していくことが、より良い支援につながると考える。今後も、利用者の「伝えたい」という思いを尊重し、たとえ時間がかかっても諦めずに向き合い続けることが、信頼関係を築き、その人らしい生活を支える支援へとつながると考える。

【おわりに】

本事例を通して、言葉がうまく出せない利用者であっても、「伝えたい」という気持ちは消えていないことを改めて実感した。日々の関わりの中で、職員が諦めずに耳を傾け、思いを引き出そうと工夫を重ねることが、利用者の表情や行動の変化につながることを学んだ。発語に限らず、表情や視線、仕草などの観察を行い、言葉にならない思いに気付ける支援を行うことが、今後ますます求められていく。今後も、利用者一人ひとりの思いに丁寧に寄り添いながら、その人らしい生活を支える支援を続けていきたい。

ポスター | リハビリテーション/体位保持/レクリエーション/コミュニケーション/その他

2025年11月28日(金) 13:00 ~ 14:00 会場 (シーモール 5F フリースペース)

[P-LGFEZ] リハビリテーション2/体位保持/レクリエーション/コミュニケーション/その他

座長：池上 美保代 (介護老人保健施設あいおい)

13:48 ~ 13:56

[28-P-LGFEZ-07] 老健における入院リスクを減らすための予備的研究

長野県 ○浦野 篤, 横沢 明美, 原 瑞恵 (介護老人保健施設ハーモニー)

【目的】

介護老人保健施設において入所者の体調悪化を予防することは、入所者やご家族の安心につながるだけでなく、在宅復帰率維持や所定疾患施設療養費の算定など介護施設としての経営基盤の維持にもつながる重要な取り組みである。しかし、入所されている方々は基本超高齢であり、生理的予備能も低下し、心不全増悪や誤嚥性肺炎、転倒による骨折など医療機関での治療が必要になりやすい状態でもある。先行研究では、栄養因子が入院リスク判定に有用であるという報告もあるが、経時的变化をみている報告は散見されない。

そこで今回、入院される方と入所継続できている方で、12か月前から基本情報や栄養因子などで変化をみるできないか調査した。

【方法】

対象は令和6年10月時点で本入所している利用者のうち、入所中に入院し入院時点から過去12か月入所歴がある者15名を入院群。入院せずに12か月入所歴がある者33名をコントロール群とした。採取データは、測定が簡便で日々の一連業務の中で評価している項目とした。要介護度、栄養アセスメント、食形態、Barthel Index(以下:BI)、体重、Body Mass Index (以下:BMI)とした。これらの項目を12か月分、各12個採取した。解析には、統計解析フリーソフトEZRを使用し、両群間での相関を算出するために線形混合モデルを用いた。被験者間の変動を考慮するため、利用者IDを切片のランダム効果としてモデルに含めた。モデルはREML法により適合され、固定効果の有意性検定にはSatterthwaiteの自由度推定法を用いた。

【倫理的配慮】

ヘルシンキ宣言の倫理原則に基づき実施された。参加者には匿名性が完全に保証され、データは個人が特定できない形で収集・分析された。得られたデータは研究目的以外には使用せず、厳重に管理された。

【結果】

線形混合モデルによる各群で時間経過が各項目に与える影響 (相互作用効果の推定結果) を、推定値/標準偏差/ t 値/p値の順で以下に表す。

要介護度：0.021/0.008/2.57/0.01、栄養アセスメント：0.048/0.014/3.498/<0.001、食形態：0.0006/0.01/0.064/0.94、BI：0.296/0.277/1.069/0.286、体重：0.048/0.014/3.498/0.001、BMI：0.048/0.014/3.498/0.001。時間経過に対し入院群と未入院群で有意差があったものは、要介護度、栄養アセスメント、体重、BMIであった。

【考察】

要介護度は、入院群と未入院群ともに時間経過とともに増加傾向にあるが、未入院群はそれが有意に緩やかであった。栄養アセスメントは、入院群では時間経過とともに悪化する傾向があるが、未入院群ではそれが改善する傾向があった。体重は、入院群は時間経過での変化は有意な変化が見られない一方で、未入院群ではそれが有意に低下する傾向があった。BMIは未入院群において時間経過とともにBMIが有意に減少する。

先行研究の同様に、栄養アセスメント・体重・BMIといった栄養因子の有意差が認められた。要

介護度については増加の傾きが一つのリスク指標になることも示唆された。
今回は、各項目が入院群と未入院群で有意差があるかを検証したが、今後は時間経過の中でどの時点から両群に有意差が生まれるか、さらに項目も増やしながらいん院を未然に防ぐ指標を作成していく。